



Title	タイで学ぶ公衆衛生、アジア・アフリカ出身の友人達、そして、タイでの暮らし
Author(s)	高崎, 映子
Citation	目で見えるWHO. 2023, 84, p. 20-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92355
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

タイで学ぶ公衆衛生、アジア・アフリカ出身の友人達、そして、タイでの暮らし



マヒドン大学 公衆衛生修士課程

高崎 映子

2022年6月マヒドン大学、公衆衛生修士課程。2017年4月～2022年6月岩手県立病院内科。2017年3月東北大学医学部医学科卒業。

留学までの経緯

はじめまして。2022年6月から、タイ、バンコクにあるマヒドン大学の公衆衛生修士課程で学んでいます。タイに来る以前は、岩手県南部の総合病院で、内科医として5年間働いていました。私が働いていた病院は、地域の中核病院で、急性期医療を担うと同時に、超高齢化社会を迎え、中長期的な患者家族支援も行っていました。

ここで、タイに公衆衛生を学びに来たきっかけをお話します。私が働いていた病院に、感染症の疫学研究をしているドクターが非常勤で働きにきていました。彼が、感染症調査やアウトブレイクの緊急支援のため、東南アジアやアフリカ諸国を訪れているという話を聞き、大変興味を持ちました。熱帯医学や感染症について学びたいと思い、2021年春に、長崎大学熱帯医学研修課程という3か月間の短期研修に参加しました。そこで、座学と実習を通じて、熱帯医学や国際保健について学びました。

私は参加当時、海外での保健医療分野で活動した経験はなかったのですが、熱帯医学研修課程の参加者の大半が、海外で保健、公衆衛生分野で活躍していた経歴に感銘を受けました。日本とはまったく異なる背景で、保健医療について学びたいと思い、そして、生活してみたいと思い、タイへの留学を決めました。熱帯医学研修課程終了後、結果的に、私を含めた同級生の何人かが、公衆衛生や国際保健を勉強するため、国内外の大学院に進学することとなりました。

授業、グループワーク、フィールドワーク、そして修士論文

現在私が参加しているマヒドン大学のプログラムは、14か月コースで、大きく分けて、前期と後期の座学、タイのコミュニティを対象としたフィールド調査、修士論文から成り立ちます。前期の授業では、疫学、統計、保健医療システム概論、行動科学と健康増進、環境・職業保健、リーダーシップやチームビルディングなどを学び、後期は、母子保健、感染症疫学、保健医療経済、保健情報システム、媒体作成、生活習慣病予防などから、授業を自由に選択できます。

同級生は合計16人で、10人がミャンマー、3人が東ティモール、ソマリア、バングラデシュ、日本から1人ずつ参

加しています。タイの学生は、カリキュラムが異なり、交流はほとんどありません、同級生の背景は、NGOで働いていた人、伝統医療の研究者、公的な公衆衛生分野で働いていた人などさまざまです。

私の友人の何人かは、英国や日本で公衆衛生を学んでいます。彼らの話と比較すると、マヒドン大学の授業は実践を重視した内容になっているようです。授業内でプロジェクトを考え、実際に論理的なプロジェクトの計画書の作成を行うことがあります。コース全体を通して、ひとつの修士論文を完成させることが最終的な目的で、研究計画作成のための授業があります。公衆衛生課題をひとつ選び、そのテーマについて研究計画を立て、自分で実際にデータ収集を行い、修士論文を完成させます。研究計画の作成にあたり、指導教官と何回もやり取りを繰り返



写真1 同級生たちと前期最後の授業



写真2 タイの友人家族と寺院を訪れたとき

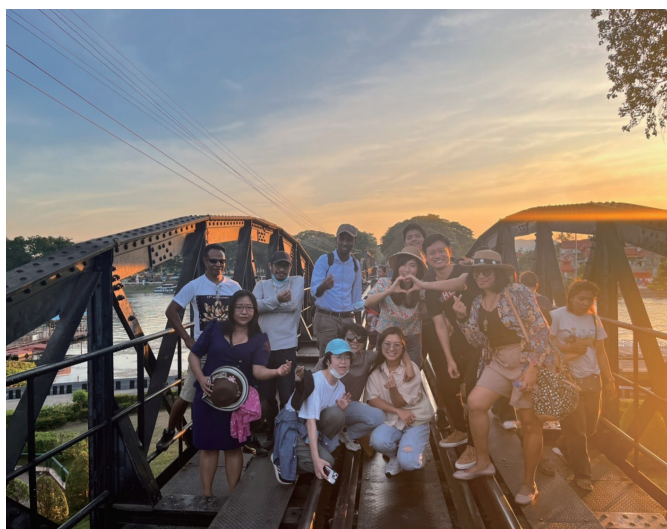


写真3 同級生と泰緬鉄道にて

返します。

マヒドン大学のプログラムは、授業以外での活動も盛んで、主に異文化交流を目的として、大学の伝統行事や祭礼への参加、同級生間の文化交流、宮殿や歴史的な建造物の見学、そして、タイ健康増進協会などへの課外活動がありました。さらに、前期と後期の間に、コミュニティー調査のため、バンコク市内のある地域を訪れました。質問票作成、データ収集、データ解析、健康課題の優先順位付け、そして、論理的な介入策の作成を、1週間で行いました。時間が限られる中で、同級生との衝突も何度かありましたが、活動を通じて、相互理解がとても深まったと感じています。普段自分が生活しているところに近い地域の方々と直接やり取りをすることもでき、大変貴重な機会となりました。

同級生とのエピソード

私は、タイに留学するまで、海外での活動経験も、公衆衛生領域での活動経験もなく、プログラム参加当初は、授業に参加することはおろか、同級生とコミュニケーションをとることすらままならない状態でした。しかし、クラスに日本人が私1人しかいなかったため、授業内外のすべての場面で同級生とコミュニケーションを取らざるを得ず、半ば強制的に、コミュニケーション能力を獲得した

面があります。同級生には、大変感謝していますし、同級生同士のグループワークを通じて、また、お互いの経験を共有することにより、理解を深めることができたと感じています(写真1)。

友人たちとの大変思い出深いエピソードとして、タイ北部、ミャンマーとの国境沿いにある町 Mae sot に、ミャンマーからの同級生と一緒に、2泊3日の旅行に行った時のことを書かせていただきます。Mae sot は、タイ国内にある、最も有名なミャンマーからの移民の人たちのコミュニティーのひとつです。そこに拠点を置く NGO で、ミャンマー出身の同級生のひとりが、働いています。彼女と NGO で働くメンバーは、Mae sot に住むミャンマーからの移民の人たちや、タイ側からミャンマーの農村地域に、保健サービスを提供する活動をしています。Mae sot にあるミャンマーのコミュニティーを訪れることと、NGO で働く彼女のもとを訪ねることが、旅の目的でした。旅行に行った時は、ミャンマーの農村地域で保健活動に携わるスタッフが、Mae sot に研修に来ていて、彼らと交流したり、マヒドン大学の卒業生に会って卒業後のキャリアについて教えてもらったり、近くにある国立公園で川遊びをしたり(私は淡水には入水していませんが)、市場に行って友人たちとミャンマー料理を楽しんだりしました。中でも、Mae sot

側から、ミャンマーの町ミャワディーを、友人たちと眺めたことが、とても印象に残っています。

タイでの生活

最後に、タイでの生活についてです。原稿執筆時は、タイで暮らし始めて7か月が経とうとしています。タイには日本人も多く在住し、古くから両国の文化交流は盛なようです。仏教国であり、国内には多数の寺院があります。観光業がとても盛んで、年間を通して国内外から本当にたくさんの観光客が訪れています。

私には、留学以前からのタイ人の友人が3人おります。2人は、高校時代の同級生で、タイ国外の大学、大学院に進学し、その後はタイに戻り、都市計画と経済分野で、それぞれ仕事をしています。残りの1人は、日本からバンコクに来る飛行機の隣の席に座っていた男性を通じて、タイに来てから知り合いました。バンコクに住み始めてから、これまでに、タイの友人たちの家族の年中行事に招待される機会が何回かありました。旧市街や寺院に行き、タイの旧首都であるアユタヤという歴史的な名所に連れて行ってもらいました。タイの友人たちとその家族のおかげで、彼らとの交流を通じて、タイ文化に触れ、それを理解する貴重な経験となっています(写真2)。